

女子大学における地理教育

外山雅代

1. はじめに

筆者は、現代社会において女性がおかれている地位、直面している様々な問題に関心をもってきた。さらに、地理学の専門教育を受け、地理学についていろいろ考察をめぐらすうちに、自らの経験をふまえて、教育の場における地理と女子学生の関わりについてを卒業論文の研究テーマとして取り上げることを試みることにした。そのため、お茶の水女子大学の地理学科の卒業生から御教示いただくことが最適と考え、いろいろお手数をかけることとなったが、アンケート調査を実施させていただいた。本稿は、卒業論文の本体を成すこの部分を中心に再構成したものである。

2. 卒業生へのアンケートの目的と方法

教育を受けた者の視点から、女性の高等教育と高等教育における地理(学)を見ることを第1の目的とし、加えて、卒業生のその後のキャリア(仕事・学問)との関わり、社会への認識を考察できるような設問を加えた。全体を通して、筆者の関心から、女性としての視点が明らかにされるように配慮した。

設問の具体的内容は、以下のようになる。

① 高校時代について

高校の所在地、地理への印象、お茶の水女子大学を志望した理由、進学への反対の有無

② 大学在学中について

地理(学)への印象、地理学科の印象、女子大学への印象、教員資格の取得の有無

③ 卒業後について

進路、現在の状況

④ 女性と社会について

⑤ 国立女子大学について

アンケートの対象は、学科の卒業生名簿を利用し、第1回卒業生から第41回卒業生までの641名を母集団とし、名簿順に3人に1人を抽出した。

そのうち住所不明者、海外在住者、物故者等を除き、結果的に200名を対象とした。1993年8月下旬に用紙を発送し、9月中旬までに返送いただいた。回答数は105、宛て先不明8、回答拒否2で、回収率は52.5%となった。

集計では以下のようにグルーピングしている。

第1～12回生(昭和28年～39年卒業):27人、

第13～22回生(昭和40年～49年卒業):25人、

第23～32回生(昭和50年～59年卒業):22人、

第33～41回生(昭和60年～平成5年卒業):31人である。

通常のアンケート回収率とは比較にならないほど多くの方々に御協力いただき、なによりも感謝いたすとともにまた一方で、身の引き締まる思いをした。

3. アンケートの集計結果

(1) 高校時代について

1) 出身校高校の所在地

東京都で全体の43.8パーセントをしめ、東京を含めた関東近県(埼玉・千葉・神奈川・茨城・栃木・群馬)の割合は約6割に達する。福島を除き、東北・北海道地方が0となっているのは、近年その地域の出身者がみられるようになってはいるが、少ない状況を示しているともいえる(第1表)。

2) 地理への印象について

高校時代に地理が好きであったかどうかについてみると(第2-1, 2-2表)、全体の85.8%が「好き」もしくは「どちらかといえば好き」と回答し、「嫌い」もしくは「どちらかといえば嫌い」は5.7%にとどまっている。この結果は生徒や児童を対象に行う教科への興味・関心の一般的調査で、地理を好きとするものよりは嫌いとするものの方が圧倒的に多く、殊に女子においてはその傾向が強いとされるのとは非常に対照的で、地理への関心の高い集団であることがわかる。

その関心の内容は「いろいろな地域のことを学

べる」が最も多く、全体の29.0%をしめる。次いで「旅行が好き」21.0%、「地図が好き」19.4%と続く。「その他」の意見では「自然環境や人々の暮らしの様子、およびその相互関係などに興味があった」とする回答が多かったが、間口の広い学問であることを反映してか、それぞれのとらえ方で地理に興味を持っていたことがうかがえる。

第2表を見るかぎり、近年の世代になるほど、地理の好嫌の比重が嫌に傾いているように思われるが、その理由はほぼ「暗記教科だから」に集中している。受験競争の激化によって、高校での授業が詰め込み式と批判されるようになったことと無関係ではないと思われる。

3) お茶の水女子大学を志望した理由

「学力が見合っていた」とする回答が最多で23.4%を占めるほかは、だいたいにおいて回答内容は多様になっている(第3表)。

いずれの時期の卒業生でも「教師になりたかった」とする回答は以外と少ない。後に記する地理学科への志望理由を見ても同様に教員を希望する数は少ない。高校時代に地理に興味・関心を持っていても、それを将来の職業と関連させている人は少数であることになる。教員だけが地理に関係のある職業ではないが、児童・生徒にとっては一番目につきやすい職業であるにもかかわらず、地理教員全体における女性教員が少ないことを反映しているのかもしれない。

「都心にあるから」という理由は、年々の増加傾向が顕著で、大学の大衆化など高等教育の普及で大学選びが変化してきたことの現れであろう。

「その他」の意見では「国立である」、「学費が安い」、「自宅から通える」、「知り合いに卒業生や学生がいる」の順に多く、大学紛争のあった昭和40年代の回答では「東大入試が中止となり次善の策として」というものもあった。「国立である」は概ねどの年代にも見られるが、「学費が安い」は比較的早い年代に、「自宅から通える」は50年代以降に多い。

4) 地理学科を志望した理由

「地理が好き・地図が好き」に代表されるような、地理そのものへの関心を理由とする人が全体の45.6%と約半数を占める一方で、史学科や英文科を希望していたのだが学力的に地理学科の方が入りやすそうであったとか、希望していた学科が

なくて一番近そうだったので、というような選択も全体の32.8%ある(第4-1表)。

「その他」の中では「地理と聞いて漠然と面白そうな感じを持ったから」というものも比較的多数あった。後の、大学で学んだ地理についての設問とも関係するが、大学入試前の段階では、大学の「地理学科」ではどのような学問を実際に行っているのかを大半の人がはっきりと知っているわけではないことや、自然地理の興味・関心が非常に薄いということももっと問題にされてもよいかもれない。

なお、お茶の水女子大学に地理学科があることを知ったのは、75.2%が「受験で志望校を考えるようになってから」で圧倒的に多く、情報源は「受験雑誌で見た」が52.3%、「先生から聞いた」18.3%と続き、「その他」の意見の3分の1は「知人・身内・恩師などが卒業生だった」とする回答が多く、それも初期の卒業年次の回答に日立つ傾向がある(第4-2、4-3表)。

5) 進学反対の有無

この設問は、お茶の水女子大学や地理学科に限定せず、大学進学そのものについての反対の有無を意図していたのであるが、設問の流れからお茶の水女子大学や地理学科への反対の有無と解釈された方も多かったようである。従って、この点に留意して結果を見る必要があるが、反対が「あった」との回答は全体の13.3%にとどまっている。反対理由を考慮すると、初期の卒業生は別としても、進学反対の声は非常に少なかったといえる(第5-1表)。

主に誰から反対されたかという設問では「両親」とする回答が多かった。東京女子高等師範学校の卒業生に対する同様のアンケート(財団法人地域社会研究所(1975):『高年齢を生きる 7 お茶の水出の50年』国勢社, 119P.)では、反対ありは20%弱で反対者の多くは母親であるという結果がでているが、今回のアンケートでは「両親」と回答しつつ、「主に父親」と注釈を付けたのが目立ったのは興味深い(第5-2表)。

反対理由は、昭和29~39年の時期と昭和50~平成5年の時期のものでは内容が一変している。自由回答であったものを類型化して集計した結果、前者では「女の子に4年は長い」、「女子に高学歴は不要」など端的に「女であるから」とする理由

が5,「経済的理由」3,「女子大学反対」1となり、後者では「東京の一人暮らし(実家を離れる)」3,「共学のほうがよい」3のほか,「もっと上の大学を」,「潰しの効く学科を」などと,より高い教育を得るためや,社会に出てからのことを考えて,お茶の水女子大学や地理学科への進学を反対するという内容になっている。このような変化の背景には,女子教育が普及してそれともない女性の社会進出が進行したこと,共学に対して女子大学の地位が低下したことなどが関連していると思われる。

(2) 大学在学中について

1) 地理への印象

大学で地理学を学んだことによって地理に対する考え方が変わったと思うか,という設問に対して,「大きく変わった」と「少し変わった」を合わせると68.5%で,この割合は年々高まる傾向にある(第6-1,6-2表)。

地理への印象が「変わった」という回答72の自由回答の内容をみると,プラスに変化したという「肯定的意見」が51,反対に「否定的意見」が10,その両方あるいは曖昧な表現をしているのが5,白紙6となっている。第6-3表は自由回答の内容を細分化して分類したものであるが,「肯定的意見」に共通しているのは,よく指摘されることであるが,小・中・高校までの地理教育と大学における「地理学」教育との乖離とも読める。「地理といえば地誌か人文地理だと思っていた」,「暗記教科でないと考えた」というのは,それまでの地理教育に対する印象を反映している。

2) 地理学科について

地理学科で学んでよかったと思う点および悪かったと思う点について,という設問は自由回答でお願いしたため幅広い意見が寄せられた。第7-1表は,地理(学)および地理学科に関連すると判断したものについてまとめたものである。

良かった点の「総合的・客観的視野が広がった」は,「土地と人的現象を総合的に考えるようになった」,「多角的な視点に気がついた」,などと,地理学が要求するものの見方についての様々な意見を含んでいる。「巡検がよかった」は,巡検で地域と人的現象を相関的に見ようとする視点を持てたことが良かったと思うとか,そういう見方

が後々旅行に行ったときなどにも生かされ,単なる観光に終わらない,などというような内容を含んでいる。関連し,卒業論文のフィールドワークで実際に体を動かし,フィールドとじっくり付き合ったことを上げている例もある。「少人数であること」は,教師・学生との緊密な繋がりなど少人数のメリットをあげたものを含んでいる。

否定的意見で最も多かった「範囲が広すぎてかえって漠然としてしまった」は,良かった点の裏返しでもあって,広い学問領域や多角的な視点に目が向くようになったのはよいが,結局4年間で何を学んだのかよく分からないままに終わってしまった,またはこれだという専門知識の獲得には繋がらなかった,などが代表的である(第7-2表)。

多くの卒業生が地理が要求する多角的に物事を見ることや,事実(フィールド)を重視して考えるということが高く評価している一方で,地理学がどのような学問であるのかという点になるとはっきり把握できないまま卒業してしまっているようである。

「生温い雰囲気・鍛えられない」は,学問的に鍛えられることが少なかったという意見である。楽ではあるがその分実力もつかないし実績も残せない,また社会に出てから困るというような内容を含んでいる。

自然地理に偏っていると指摘している回答が,良かった点よりも悪かった点で若干多く見られるのは,女子学生の場合その多くが人文科学系を志向する傾向があることと無関係では無いと思われるが,希望するカリキュラムの選択において,学生との意識のずれともとれなくはない。

「その他」の中には,良妻賢母教育であるとか,女性の問題に関する指摘がみられる。

3) 女子大学について

この設問も自由回答で依頼した(第8-1,第8-2表)。女子大学であることのメリットに,女性だけの状況では女性がリーダーシップを取らざるをえない,あるいは取るができる,ということがよくあげられる。共学や一般社会では,女性が補助的な位置に置かれていることの反映であり,「女性が主体的に学べた・活動できた」というのは,このことを考察しての回答であろう。

反対に,「甘えあいの構図」も指摘されること

である。学生にとっては「男でない」という共通項ゆえに過ごしやすい環境ができあがることも確かで、「同じような考え方、立場のひとたちと過ごせた」とするのはその一例である。そのために行動範囲や視野が狭くなったり、こじんまりとまとまってしまうたりと「刺激が少ない」状況にもなりやすい。女子大学であることのプラスとマイナスは、「女子だけ」という環境をどのように扱いかにかかっているとと言える。

なお、マイナス評価の内容が、前記の学科への同様の評価と類似しているのは、学科への評価も女子大学であることと関連していると考えられる。

4) 教員資格の取得について

資格取得者は全体の91.4%をしめ、昭和60年～平成5年の卒業者を除いてほぼ全員取得している(第9-1, 9-2, 9-3表)。近年取得者が減少しているのは、社会科の教員の需要が著しく少ないことに加えて、好景気で教員以外の職種への女性の進出がそれ以前に比して容易になったことと関連していると思われる。資格を取得しなかった理由が、「教師以外の道に進もうと思った」という回答に集中していることから伺える。資格取得理由では入学前の段階に比べて「教員になりたかった」とする回答が大幅に増加している。就職を具体的に考えるようになってからの選択と考えられる。「何か資格が欲しかった」や「その他」の「後で役に立つかもしれない」が、自己の可能性の幅を拡大するための選択肢の一つとして働いたのであろう。

資格の内容は、社会科のみ、あるいは他の教科を合わせて、全員が社会科を取得し、中学・高校両方の資格取得者は、96人中90人である。小学校の資格取得者は3人である。社会科以外の教科では理科6人、国語4人である(第9-4表)。

(3) 卒業後について

1) 地理学科卒業後の進路

文教育学部に大学院人文科学研究科地理学専攻が設置された昭和41年から進学者は多くなる。進学した15人のうち10人は、その理由としてより専門的な勉強・研究を希望したことをあげている。最近10年間で、教職についた人は毎年0～3人で、多数の人が教員資格を取りながら一般企業に就職するかたちになっている(第10-1, 10-2

表)。

就職に際し、大半の人が「自分のやりたい職種または業種」を重視している。卒業時期にかかわらず「給与・休暇など待遇が良いこと」よりも「女性が長く努められるような制度や雰囲気があること」とする回答が多いことから、女性の社会進出が進んだといっても、職業と女性の関係には困難が付きまとっていることは相変わらずの状況であることを示している。

「その他」の意見は卒業時期によって大きく異なっている。昭和28年～39年の時期は就職難でもあり、さらに女性の社会進出も現在ほどでは無い時代であったことから、就職の条件など考えられる状態ではなかったという回答が多い。卒業時期が近年になるにつれて徐々に、仕事やプライベートな時間に余裕を求める意見、女性であっても発言権や存在感が持てる職場を求めるという意見が見られるようになってきている(第10-3表)。

就職に際して、あるいは就職後、地理学を学んだことがどのようにキャリアに役立っているかという設問に対しては、「大変そう思う」、「そう思う」とする回答が6割をこえている。一方、「あまりそう思わない」とする回答が、卒業時期に関係なくほぼ3分の1を占めていること、この割合が近年になるにつれ増加しているのは注目される(第10-4表)。

2) 国立女子大学について

この設問も自由回答でお願いした(第11表)。それぞれの思い入れも重なって貴重な多様な内容となっている。国立女子大学の存在に、明確に賛成・反対というよりは、条件付き賛成、条件付き反対という表現となっていることが多く、数字でとらえることはできない。

「あってもよい」は、「ぜひ存在するべきである」から「一つくらいはいいのでは」などを含んでいる。しかし、その条件は、「ただし学問的にはもっと積極的な交流を行うべき(聴講生や研究生など)」、「現在の社会においてはまだ女性が中心となれる場を提供することの意味は大きく、もっと平等な状態になるまで過渡期には必要である」、「女性の研究者を育てる国立機関という立場を明確にした上で」、「女性が社会で活動するために役立つ教育(実務的な学問や女性学などを含む)や施設や制度を設けるならば」となっている。

他方、「存在意義は薄い」としたものは、「女性だけのなかで自立自覚を高めても、両性がいるところ（社会）でやっていけるようであれば結局意味はないから」・「女性を鍛えるような学問に熱心でないのならば」・「国立では一種の差別である」などとなっている。

全体として、別学のままでも共学になるにしても、「学問的には活性化をはかるべき」とする意見が多かったように思う。また女子大学賛成・反対の判断は、現実の社会をどのようにとらえるかによっても左右されるところが見られた。現在の社会にはまだ差別的な意識が残っていると考える人の場合、「存在する意義がある」とし、差別は解消されてきたとする人は、もはや「必要ない」、むしろ逆差別になりうるとしている。

「存在する意義がある」とした人の場合、差別を前提条件としてとらえているものと、克服するべきものとしてとらえているものとの強調点のおきどころの相違により、多様な意見となっていると考える。

しかし、いずれの立場からの回答であれ、「女性のための大学」であることは一貫して望まれている。

4. さいごに

最初に記したように、本稿は、女性と地理教育についてのアンケート調査の結果を中心にまとめたものである。なによりも、卒業論文作成のためにアンケートの設問に熱心に回答くださった卒業生、先輩諸姉に、この場を借りてお礼申し上げる。卒業論文を作成するという目的を超えた、大きな収穫を筆者にもたらすこととなった。

一枚一枚の回答された用紙の重みをいままさらながら感じている。そこに記された内容の、類型化・デジタル化は困難であるが、まとめることの必要から筆者の観点から整理した。回答を寄せて下さった方々の意向や期待をどれだけくみ取れたか、不十分な点がいろいろとあることは否定できないが、結果をお知らせすることが第一の責務と考え、本稿をまとめることとした。

現在、大学は大きく変革しようとしている段階にあると聞いている。このような社会の変革のなかでお茶の水女子大学がどのように、また、地理学科がどのようになるのかは分からないが、女子大学の存在意義、地理学を学ぶことの意義は、卒業生も、そしてそれに続くこれからの後輩も考えつづけていくテーマであろうと思う。

Education of Geography
—A Case Study in Ochanomizu University—
Masayo TOYAMA

第1表 出身高校所在地

		S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
東	京	11	13	7	15	46(43.8)
神	奈	4		2	2	8(7.6)
愛	知	2	1		2	5(4.8)
長	野	1	3			4(3.8)
山	口	2	1		1	4(3.8)
埼	玉	1			2	3(2.9)
愛	媛	1	1	1		3(2.9)
福	岡			2	1	3(2.9)
新	潟			2		2(1.9)
富	山			1	1	2(1.9)
福	島	1	1			2(1.9)
群	馬			1	1	2(1.9)
千	葉			2		2(1.9)
大	阪		1		1	2(1.9)
静	岡	1			1	2(1.9)
そ の 他 名 づ け	山 梨 ¹⁾ 岡 山 和歌山		山 形 三 重 香 川 熊 本	石 川 兵 庫 島 根 徳 島	栃 木 岐 阜 奈 良 佐 賀	15(14.3)
計		27	25	22	31	105(100.0)

注1) 疎開先。もとは東京生まれの東京育ち。

第2-1表 高校時代地理における地理の印象 (記号選択)

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
好き (得意科目)	13	14	10	11	48(45.3)
どちらかといえば好き	12	7 ¹⁾	10	14	43(40.6)
ふつう	1	3 ¹⁾	1	2	7(6.6)
どちらかといえば嫌い		1		2	3(2.8)
嫌い (苦手科目)			1	2	3(2.8)
その他	1 ²⁾	1 ³⁾			2(1.9)
計	27	26	22	31	106(100.0)

注1) 「どちらかといえば好き」, 「普通」の両方を答えた人は各1名とした

2) 高校で地理は選択できなかったので答えられない

3) 地理は学習していないが好きだった

第2-2表 地理が「好き」であった理由 (記号選択 複数回答可)

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
暗記教科だから			1	1	2(0.8)
先生が面白かった	9	3	5	7	24(9.5)
知識として役立つ	1	3	2	5	11(4.4)
色々な地域のことを学べる	13	19	18	23	73(29.0)
地図が好き	8	14	11	16	49(19.4)
旅行が好き	13	15	10	15	53(21.0)
自然環境などに興味があった	7	7	8	5	27(10.7)
その他	7	4		2	13(5.2)
計	58	65	55	74	252(100.0)

第3表 お茶の水女子大学志望理由（記号選択・複数回答可）

	S 28～39	S 40～49	S 50～59	S 60～H 5	計 (%)
女子大である	5	1	5	3	14(5.6)
学力が見合っていた	11	13	15	20	59(23.4)
勉強がしたかった	7	4	3	5	19(7.5)
地理（学）を学びたかった	3	6	4	10	23(9.1)
周囲のすすめ	4	8	5	8	25(9.9)
懂れていた	1	5	5	5	16(6.3)
伝統がある	6	5	4	6	21(8.3)
教師になりたかった	4	6	4	4	18(7.1)
大学ならどこでも良い		1	1	1	3(1.2)
都心にある	2	7	6	12	27(10.7)
その他	8	10	3	6	27(10.7)
計	51	66	55	80	252(100.0)

第4-1表 地理学科志望理由(記号選択・複数回答可)

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
地理そのものへの関心	17	14	10	16	57(45.6)
地理を学びたい	2			2	4
自然地理・自然環境を学びたい	1			2	3
色々な地域について学びたい		1	2	4	7
人と地域・人的現象等のつながりを学びたい	3				3
旅行が好き	1				1
高校の授業がよかった	3	1		1	5
地理が好き・地図が好き	3	6	5	5	19
教師になりたい	1	3	3		7
その他 ¹⁾	3	3		2	8
消極的選択 ²⁾	8	11	9	13	41(32.8)
周囲のすすめ	3	2		1	6(4.8)
その他 ³⁾	1	2	4	10	17(13.6)
白紙	2		2		4(3.2)
計	31	29	25	40	125(100.0)

注1) 文系で理系的, 社会科が好き, 巡検にいきたかった, など

2) 学力が見合っていた(他学科と比べて入りやすそうだった), 主目的は地理学以外(文化人類学など)にありその手段として, など

3) 幅広く学べそう, 面白そう, など

第4-2表 お茶大地理学科の存在を知った時期(記号選択)

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
高校入学前から	3	2	1		6(5.7)
高校1~2年くらい	2	6	3	4	15(14.3)
受験で志望校を考えるようになってから	20	15	17	27	79(75.2)
その他	2	2	1		5(4.8)
計	27	25	22	31	105(100.0)

第4-3表 存在を知った方法（記号選択・複数回答あり）

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
両親からきいた	2	2			4(3.7)
先生からきいた	4	7	4	5	20(18.3)
友人からきいた		2	2		4(3.7)
受験雑誌で見た	11	10	12	24	57(52.3)
予備校で知った			1	1	2(1.8)
その他	10	5	5	2	22(20.2)
計	27	26	24	32	109(100.0)

第5-1表 進学反対の有無

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
あった	7		4	3	14(13.3)
なかった	20	25	18	28	91(86.7)
計	27	25	22	31	105(100.0)

第5-2表 主な反対者（記号選択）

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計
両親	4		4	2	10
兄弟姉妹			1		1
先生				2	2
その他 ¹⁾	2				2
白紙	1				1
計	7		5	4	16

注1) 親戚

第6-1表 地理への印象の変化(記号選択)

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
大きく変った	4	4	10	15	33(31.4)
少し変った	8	15	8	8	39(37.1)
あまり変らない	12	5	4	8	29(27.6)
まったく変らない	1	1			2(1.9)
その他(白紙)	2				2(1.9)
計	27	25	22	31	105(100.0)

第6-2表 「変わった」と答えた人の年代別の割合

S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~63	H 1~5	平均
44.4%	76.0%	81.8%	86.7%	62.5%	68.5%

第6-3表 どのような点が変わったか（自由回答）

		S 28～39	S 40～49	S 50～59	S 60～H 5	計
肯定的意見	暗記教科でないと思った	1	1	2	10	14
	多角的視野・新しいもの 見方に気付いた	1	1	2	7	11
	学際的。間口が広い	1	4	5	1	11
	地理といえば地誌か人文地 理だと思っていた		7	2	2	11
	高校までとのギャップを感 じた		1	1	3	5
	知識や趣味でなく、学問と しての地理を認識した	1			5	6
	大学の地理は自然地理が主 体だと思った	1				1
	その他 ¹⁾	1	2	1	3	7
否定的意見	面白さを感じなくなった	4			1	5
	知識の羅列の域を出ない	2		1		3
	浅く広くで中途半端		1	1	1	3
	現実の社会（生活）との乖 離	1			1	2
	自然地理が主体			1		1
白 紙		2	1	2	1	6

注1) 「その他」の内容は、「実践が大切な学問であることを知った」（S 28～39年）、「理解、考察が多い」、「人文と自然で全く異なる学問である」（S 40～49年）、「巡検が地理の基本である」（S 50～59年）、「巡検のような目で旅行ができる」、「自然から人間へ興味移った」、「地理の概念が変わった」（S 60～H 5年）である。

2) 中間的な意見は5人で、内容は「学問になろうとして苦勞している」、「広い意味での知識はふえた」、「自然地理の学習は予想外であった」（S 28～39年）、「専門化しすぎて却って地理とは何かわからなくなった」、「記述的学問である」（S 40～49年）、「はじめに自然がきて面食らった」、「扱いにくい学問」（S 50～59年）などの内容を含んでいる。

第7-1表 地理学科で学んで良かったと思う点（自由回答）

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計
巡検が良かった	4	13	3	1	21
総合的・客観的視野が広がった	8	6	2	7	23
学問的・地域的に広い領域を学べた	3	2		7	12
卒論などフィールドに深く関係できたこと			3	5	8
少人数であること	2		1	3	6
よい友人に恵まれた	1		2	2	5
自分の職業に直結	1	1		2	4
理論的に（地理を）学べた	3			1	4
自分なりの観点でまとめたりアプローチする力を 養えた			1	2	3
先生が良かった		1		3	4
実証的・分析的姿勢を学んだ			1	1	2
特になし		1			1
その他	1	1	4	2	8
白紙	6	6	6	1	19

第7-2表 悪かったと思う点（自由回答）

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計
範囲が広すぎてかえって漠然として しまった（学際的すぎる・専門性 に薄い）	2	6	2	10	20
実用的・実務的でない（時事との 隔離）	1	3	3	2	9
生温かい雰囲気・鍛えられない		1	1	4	6
自然地理に偏重している	2	1		3	6
ライセンスがとれない			2	1	3
地理／学問に関心を持てなかった				3	3
ある程度以上は女性に不利・限界が ある	1		1		2
人文系・社会科学系は浅く広くで専 門性にかける		1	1		2
特になし		4		4	8
白紙	17	7	3	3	30
その他 ¹⁾	5	4	4	5	18

注1) その他の内容は以下のような回答を含んでいる。

S 28~39年：「教育界で存在が薄い」、「暗記科目的に教えると物の見方・考え方を学べない」、「平和・差別・人種なども学びたかった」、「巡検の費用が多額」、「単一の理論しか認めなかった」

S 40~49年：「情緒、文学の感性に乏しい」、「ゼミ形式の授業が少ない」、「自然、人文の両方を学ぶのは無駄（お互いほとんど将来役に立たない）」、「良妻賢母教育の考え方がベースにあった」

S 50~59年：「就職が大変だった」、「地理とは何か4年間考え続け、地理にこだわりすぎてしまった」、「教授陣は多く東大卒で卒業生がおらず、女性が助手等補佐にとどまっていた」、「講座が少ない」

S 60~H 5年：「自主的に学ばなかった」、「法律に弱い」、「調査費用が多額」、「半期2単位の構成は中途半端」、「かえって地理に対して自由な発想ができなくなった」

第8-1表 女子大学を志望して良かったと思う点(自由回答)

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計
女性が主体的に学べた・活動できた	1	5	8	7	21
和やかな雰囲気で気楽にのんびりすごせた	2	3	3	5	13
良い友人にめぐりあえた	1	3		5	9
真面目で優秀な人が多かった		1	1	2	4
少人数でよくまとまっており、ゆっくり学べた	3		2	2	7
よそ見せずに勉強できた	1	3	1	2	7
共学を知らないので何とも言えない	3	2			5
女性の問題について学んだり話し合えた	1			4	5
国立女子大学というネームバリューの恩恵	1	1		2	4
多くの大学の男子生徒と知合う機会がある		1	1	1	3
就職を世話してもらえた		1		2	3
同じような考え方・立場の人たちとすごせた			1	1	2
先生方との密な交流		1		1	2
特になし		2		4	6
白紙	8	1	5	2	16
その他 ¹⁾	5	3	3	3	14

注1) S 28~39年: 「丁寧な言葉づかいが身についた」、「不良学生がいない」、「他大学との交流が多い」、「伝統ある学風」、「教育界に伝統がある」

S 40~49年: 「学内がきれい」、「大学は手に職をつけるためだけでなく人生の精神文化を高めるところとっていた」、「入学がたやすい」

S 50~59年: 「女子校と同じ雰囲気楽しかった」、「落ち着いて勉強できた」、「親を安心させた」

S 60~H 5年: 「アットホームに学習できた」、「のんびりマイペースで学べた」、「女子大という特殊空間を体験できた」

第8-2表 悪かったと思う点（自由回答）

	S28~39	S40~49	S50~59	S60~H5	計
刺激が少ない ¹⁾	6	14	10	11	41
ぬるま湯，温室のよう ²⁾	4	5	2	7	18
社会に出てから戸惑う ³⁾			4	2	6
就職への取り組み・関心が甘い		1		3	4
女ばかりという環境は不自然		1	1	1	3
社会的なネットワークが薄い	1	1	1		3
かえて自分を女の枠にはめてしまった		2			2
特になし・わからない				4	4
白紙	10		3	4	17
その他 ⁴⁾	2	2	2	1	7

注1) 「行動範囲，視野・世界が狭い」，「活力がない」，「社会のことを知るチャンスがない」，「男性の良い点を吸収できない」などを含む。

2) 「学問的にも，教授たちが本気でしごかない」，「討論するようなことがない」など，を含む。

3) 「甘やかされていたから」，「男性もいるのが普通の社会であるから」など，を含む。

4) S28~39年：「良妻賢母の伝統が強く，女性の社会進出を必ずしも良しとしない雰囲気があった」，「高校とは全く違う雰囲気についていけなかった」

S40~49年：「プライドばかり高く向上心が薄れてしまう傾向があった」，「卒業後も特別視されるのでお茶大卒といづらい」

S50~59年：「意外と意識の低い人が多い」，「先生が少なくて自分の希望する学問を見い出せなかった」

S60~H5年：「合理的な勉強をしていない」

第9-1表 教員資格取得の有無

	S28~39	S40~49	S50~59	S60~H5	計 (%)
とった	27	25	21	23	96(91.4)
とっていない			1	8	9(8.6)
計	27	25	22	31	105(100.0)

第9-2表 教員資格をとった理由(記号選択・複数回答可)

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
教員になりたかった	8	8	8	6	30(24.4)
なにか資格がほしかった	8	11	11	8	38(30.9)
両親・周囲に勧められた	6	1	1	4	12(9.8)
皆がとっていた	7	9	3	6	25(20.3)
その他	5	4	3	6	18(14.6)
後で役立つかもしれない	1	1	2	2	6
当然という感じ	1	1		2	4
教職をとりやすいプログラム	1	1			2
ほか	2	1	1	2	6
計	34	33	26	30	123(100.0)

第9-3表 教員資格をとらなかった理由(記号選択・複数回答可)

	S 50~59	S 60~H 5	計
教師以外の道に進もうと思った	1	7	8
単位をとるのが時間的に難しかった	1		1
社会科の教職は考えていなかった		1	1
実際に教員になれる可能性が少ないと思った	1		1
その他			
計	3	8	11

第9-4表 教科と種類

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
社会科 (中学・高校)	20	24	16	21	81(84.4)
社会科・理科 (中学・高校)	2		1		3(3.1)
社会科 (中学)	1			1	2(2.1)
その他	4	1	4	1	10(10.4)
計	27	25	21	23	96(100.0)

第10-1表 地理学科卒業後の進路

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
就職した	24	20	16	28	88(83.8)
進学した	3	5	4	3	15(14.3)
その他			2		2(1.9)
計	27	25	22	31	105(100.0)

第10-2表 進学先(複数回答あり)

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計
本学大学院(地理)		5	4	3	12
本学大学院(地理以外)					0
他大学院(地理)	2	1			3
他大学院(地理以外)		1	1		2
その他	1 ¹⁾				1
計					18

注1) 本学専攻科(地理)

第10-3表 就職に際し重視したこと(記号選択・複数回答可)

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
自分のやりたい職種または業種	13	14	12	17	56(41.2)
給与・休暇など待遇が良いこと	1	5	3	9	18(13.2)
女性が長く勤められるような制度や雰囲気があること	6	9	8	11	34(25.0)
大企業である	1	1	2	7	11(8.1)
会社勤めは一時的なものと考えていた	3				3(2.2)
その他	5	3	1	5	14(10.3)
計	29	32	26	49	136(100.0)

第10-4表 地理学科を卒業したことが就職、その後に役立っていると思うか

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
たいへんそう思う	8	7 ²⁾	1	6	22(25.0)
少しそう思う	7	7	9	9	32(36.4)
あまりそうは思わない	8 ¹⁾	6	6	7	27(30.7)
まったくそうは思わない	1			5	6(6.8)
考えたことはない				1	1(1.1)
計	24	20	16	28	88(100.0)

注1) 就職よりもその後の社会生活に役立つ (1名)

2) 「地理学科」を卒業したことでなく、「大学を卒業したこと」が (1名)

第11表 国立女子大学について

	S 28~39	S 40~49	S 50~59	S 60~H 5	計 (%)
あってもいい	9	8	7	16	40(38.1)
わからない	6	5	7	4	22(21.0)
存在意義は薄い	8	11	6	9	34(32.4)
白紙	4	1	2	2	9(8.6)
計	27	25	22	31	105(100.0)